



5周年記念シンポジウム

短編小説の可能性

——ガルシア・マルケスの作品を中心に



野谷 文昭

はじめに

ただ今ご紹介いただいた野谷です。先ごろ名古屋外国語大学出版会から出た『悪魔にもらった眼鏡』に亀山先生と共に編訳者として関わりました。刊行目前の三月に定年退職を迎えたのですが、本日は出版会・ワイルドリベラルアーツセンター設立五周年記念イベントということで招かれ、久しぶりに東京から出向いてきました。この本は欧米を中心とする

地域の短編小説のアンソロジーで、私の訳したスペインの短編もひとつ収録されていますが、この基調講演では、私が学生時代から関わってきた、すなわち欧米の周縁地域であるラテンアメリカの文学を取り上げ、特に一九六〇年代の世界的ブームを支えたひとりで、一九八二年にノーベル文学賞を受賞した、コロンビア出身の作家ガブリエル・ガルシア・マルケスの作品を中心に、「短編小説の可能性」というテーマでお話したいと思います。

ラテンアメリカというと彼の代表作『百年の孤独』のような、長大で重厚な長編小説ばかりが書かれていると思われがちですが、実はアルゼンチンのホルヘ・ルイス・ボルヘスのように、短編小説に特化した創作を行う世界的作家も少なくありません。ボルヘスが典型的ですが、それは短編が短いながらも宇宙の秘密を表現できるということがあるからです。ただし、宇宙と言ってもテクノロジーの発達とはさして関係のない、人間という小宇宙の謎を扱うものが多いのですが。興味のある方は、『伝奇集』という短編集を読んでみてください。

世界一短い短編小説

さて、ここで引用したいのは、たった一行からなる小説です。え、これって小説なのかと思う人も少なくないでしょう。作者はグアテマラ出身のアウグスト・モンテローソで、ボルヘスと同じく短編作家です。政

変で国を追われ、最後は亡命先のメキシコで亡くなっています。私はメキシコにいるとき、あるパーティーで彼を紹介しましたが、この国に安住したのか怡幅の良い好々爺になっていました。

引用した小説のタイトルは、そのものズバリ、「恐竜」です。わずか一行なのに素材が「恐竜」というアンバランスが、早くもユーモアを誘い、同時になぜという違和感をもたらすのではないのでしょうか？ タイトルから様々なことを連想した読者は、なんだか騙された気がするかもしれません。実はここに作者の狙いがあるのです。彼には『全集 その他の物語』という短編もあります。書誌にこのタイトルを見つけたとき、一瞬本物の全集と取られかねません。つまりメタレベルの人を食ったタイトルであり、ここにもウィットが感じられます。

今、問題にしているモンテロソですが、この人は短編(cuento)それもごく短い作品しか書いていません。ラテンアメリカには、ショートやサドンフィクションというジャンルはありません。しかもモンテロソの作品は、今述べたようにウィットや風刺に富んでいます。いわゆるエンターテイメントではなく、れつきとした純文学(literatura seria)とみなされています。次に引用するのが「恐竜」の全文です。いくつか既訳がありますが、私の訳を使います。

Quando despertó, el dinosaurio todavía estaba allí

彼が目を覚ますと恐竜はまだそこにいた。

Augusto Monterroso, el dinosaurio, 1959

アウグスト・モンテソーロ「恐竜」

なんだか呆気にとられますね。この講演の準備のためにちよつと調べてみたのですが、残念ながら「世界で一番短い小説」というギネス記録は見当たりませんでした。米国のSF作家フレドリック・ブラウンの「ノック」が最短、という説もあります。「地球最後の男の部屋にノックの音がした。」というもので、ショートショートとみなされていますが、

訳語で数えると十八文字になります。一方、「恐竜」も十八文字です。ただ、こちらは、「世界で一番短い小説」としてだけでなく、文学的価値を世界の作家たちに認知されているのです。

そのひとり、イタリアの小説家で評論家のイタロ・カルヴィーノは、ハーバード大学で行うはずだった講義の遺稿を本にした『カルヴィーノの文学講義——新たな千年紀のための六つのメモ』の中で、この作品を世界一の短編小説であるとして引用しています。

また、ペルー出身のノーベル賞作家マリオ・バルガス・リョサは、『若い小説家に宛てた手紙』という評論の中で、この短編小説を取り上げ、いろいろな形で分析して見せます。例えば〈時間〉との関連で、スペイン語文法でいうところの「点過去」、「線過去」、「現在完了」と、時制を変えていくとどのようになるか、といった具合です。またこう述べてもいます。

完璧なお話だと思いませんか？ 簡潔で奇抜、鮮やかでしかも暗示に富み、すっきりした出来上がりになっているので、大変強い説得力が備わっています。小さな宝石のような話は実に豊かで、多様な読み取りが可能です(……)。

この作家の短編と言えば最初期に書いた『ボスたち』一冊しかなく、それこそ大長編を数多く生んでいるにもかかわらず、たった一行の短編について長々と論じているところがユーモラスですが、いくつかの大学での講義の経験もある彼は、大真面目に語っています。彼が言うように、多様な読み取りが可能なのです。少なくとも背景に何かありそうだといい気がしませんか？

それが暗示の力です。原文のスペイン語だと三人称単数になっていますから、目を覚ましたのは「私」ではない。スペイン語では「あなた」とも取れますが、「彼」または「彼女」が、「目を覚ます」と「恐竜がまだそこにいた」と、語り手が語っていることになります。



ところで、ラテンアメリカ文学には「恐竜」というタイトルを持つ先行作品があります。作者は短編の名手とされたウルグアイ出身のオラシオ・キログで、物語を要約するところになります。

ブラジルとパラグアイの国境を流れるパラナ河の上流で、語り手の〈私〉は風変わりな男から、中生代の世界で恐竜と出会いしばらく共に暮らしたが、しまいに大きな石をぶつけて殺してしまい、屍体は河に飲み込まれてしまったという話を聞かされる。それこそ夢のような話ですが、〈私〉はそれを事実として理解するのです。

モンテローソがこの短編を読んでいた可能性は大いにあります。だとすると、彼の作品はキログの短編を踏まえていることになるので、例の一行は本歌取りのような性格を帯びてきます。ただ、キログの短編は、収録されている版によつては「夢」と改題されているものもあるようです。それはそれで興味深い。というのも、作者自身が主人公の語った話を夢とみなしていることになるからです。でも夢落ちでは、ああそうかと終わってしまつて、奇異感が残りません。

さて、問題の一行に戻つて、ここからどういうイメージが持てるか考えてみましょう。映画の『ジュラシック・パーク』を思い浮かべた人がいるかもしれません。あるいは恐竜がいる時代に紛れ込んでしまつて、そこで恐竜に出会つてしまった人間、という風にも取れます。どちらもSFになりますね。それから、今述べたような夢という解釈、あるいは夢から目覚めたら実際に恐竜がいて、実は現実だったというものもあります。さらにこれは夢だったのだが、主人公は実際には目覚めずもう一回夢を見た、つまり夢の中の夢といった解釈も可能です。

しかしキログはSFではなく、幻想的な物語としてそれを書いていきます。組み合わせはいくらでもできそうです。モンテローソの「恐竜」の場合は、語り手が誰かもわかりませんからさらに複雑になります。単純であることが複雑な想像を誘ひ、物語を豊かにするということです。受け手の読者が積極的であればあるほど、物語は膨らんで行くのです。

ではここで、少し読み方を変えてみましょう。テキストでは隠れてい

る（可能性のある）政治的な意味合いを、この一行から読み取ろうとするとどうなるでしょうか。

そうすると、背後に強大な圧力、例えば軍事政権や独裁政権が君臨している状況が暗示されている気がしてくるかもしれません。夢だとすれば、悪夢を生む原因です。恐竜は圧政の暗喩かもしれない。ラテンアメリカなら大いにありうる状況です。でも不幸なことに、今は世界中に存在する状況でもあります。ですから読みようによっては、幻想ではなく今日的な話になってくるのです。抑圧的な政権が倒れたと思つていたら、まだ健在で、そこにあつたというわけです。実は、モンテローソは母国の軍事政権に反対して身に危険が迫り、隣国のメキシコに亡命しています。ですから、彼はこの短編で出身国の政権を恐竜に喩えて批判を行なっている、と解釈することもできます。

一方、亡命先のメキシコでは、七十年間にわたりPRI（制度的革命党）政権が続いていたのですが、名前によらず保守化したこの長期政権が選挙ではなかなか倒れず、独裁化していきます。そのイメージがまるで恐竜のようだとも言えるのです。目覚めたら、まだ独裁政権が続いていたというわけです。したがって、グアテマラからメキシコに来てみたところにも恐竜がいた、という意味合いがあるかもしれません。

短い作品ですが、このように様々な寓話性を帯びてくるので、読者一人ひとりがここから感じ取る印象も変わるはずです。短編であることで、余計な説明をせず無駄な形容詞もないことが、暗示の力、読みの喚起力を生むからです。ここが、論理的説明や解説が付加される長編小説と、大きく異なるところです。

ガルシア＝マルケスの短編

このあたりで本題に入りましょう。まず、スクリーンに映っているのはガルシア＝マルケスの写真です。壮年期ですがカッコいいですね。若い



頃はもつと痩せていて、アラブ系に間違えられたそうです。アルジェリアでフランスからの独立運動が盛んだった頃、彼は一時期パリで貧乏暮らしをしていて、警官にアルジェリア人に間違えられ、危ない目に遭ったというエピソードもあります。ここから、ガルシア・マルケスの作品について話を進めていきたいと思います。

長編小説というのは、極端にいうと何でも入れることができる袋、あるいは箱のようなもので、延々と続けることが可能だと言われます。日本の代表的作家である中上健次がボルヘスと対談を行なったときに、長編が夾雑物を入れられることを肯定的に捉えたところ、ボルヘスは夾雑物はいらないと言って反論しました。タイプの違う作家同士のやり合いが面白い対談です。

日本では中里介山作の未完の小説『大菩薩峠』は、それこそ延々と続く長編の例としてよく引き合いに出されますが、大衆小説とみなされているし、ボルヘスからすれば無駄だらけのほとんどない作品ということになるでしょう。ラテンアメリカの文学にはそのような大長編、あるいは一族の歴史を何巻にもわたって語る「サーガ」的な作品は、ガルシア・マルケスの〈マコンド物〉を別とすれば、ほとんど見当たりません。

ガルシア・マルケスの作品には、バルザックの小説に見られる人物再出法に似た手法が使われ、例えば、登場人物が共通していたり場所がどこかで通底していたりして、作品同士が関わりを持っています。フォークナーの作品にもこういう特徴がありますね。それを「間テクスト性」といいますが、先に書かれた作品に、のちに書かれる作品の登場人物がすでに出ている、などということもあります。

では、文体はどうでしょうか。彼の習作時代の『青い犬の目』という短編集は邦訳が出ていますが、そこにはヘミングウェイ、フォークナー、カフカなど、その頃彼が読んだ作家の文体が実験的に用いられています。したがって、まだ彼らしさや彼の声がはっきりとは聞こえませんが、それでも、のちの作品に出てくる土着的な要素を、モダニズムの前衛的な文体で書くという若者らしい姿勢が見られます。



刊行順は逆になりますが、この短編集に続くのが『ママ・グランデの葬儀』で、そこに収録されている作品のひとつが、今日資料として配布した *Un día de esos* です。このスペイン語のタイトルは、既訳では「最近のある日」となっていますが、本来の意味は「近いうち」とか「そのうち」です。私は、夏に出したガルシア・マルケスの中短編アンソロジーに含めるさい、「ついにその時が来た」というニュアンスを出すために、「ついにその日が」という訳語を当てました。非日常性を強調したかったからです。

しがない田舎町で診療所を開いている歯医者として、そこを訪れる町長の二人が、基本的な登場人物です。この町長は軍人でもあります。この診療所を舞台に、丁々発止というほど派手ではありませんが、宿敵同士が手に汗を握る対決をすることになるのです。

「恐竜」にはもちろん及びませんが、短編集『ママ・グランデの葬儀』に収録されているものの中では、これが一番短い作品です。書き出しはこうです。

「月曜日の夜明けは生暖かく、雨は降っていないかった。」

実は、ここにガルシア・マルケスらしさがすでに出ています。というのは、「曜日」や「天気」という要素に触れているからです。ですが、何の前提もなくいきなり「雨は降っていないかった」と、否定形になっているのはいささか奇妙だと思いませんか？ つまり、その日の朝は曇っていたということですが、単純にそうは言わない。なぜなら、普通だった雨が降っていてもおかしくないからです。しかも「昼飯前にまた降り出すだろう」と歯医者は考えているのです。ということで、この時期が実は十月に始まる雨季である、という情報が隠されていることがわかります。雨季の重苦しい雰囲気は、中編「大佐に手紙は来ない」に最も顕著に現れていますが、彼の作品では否定的な意味を持っています。冒頭の天気に触れた文で、この短編のトーンが決まるわけです。

ガルシア・マルケスの前期、すなわち『百年の孤独』までの作品の舞台は大きく二つに分けられ、ひとつは彼が生まれたアラカタカをモデル

とする〈マコンド〉という共同体です。もうひとつは、彼の学生時代に家族が移り住んだスクレという共同体で、作中では名前のない〈町〉として登場します。『百年の孤独』の舞台は〈マコンド〉ですが、「ついにその日が」では、単に〈町〉となっています。この〈町〉は共同体のネガティブな性格を備えていて、抑圧的な社会に見られるような事件がしばしば生じます。

次にこの短編の文体に注目すると、ほとんどの作品に短いセンテンスが用いられている。フォークナーの詩的文体ではなく、ヘミングウェイ的な電文文体、見方によればジャーナリスト的な文体で書かれているのが特徴で、一文が短く、余計な要素は省かれています。現れているのは氷山の一角なのです。あるいは逆に、大部分が隠されていると言い換えることもできるでしょう。そこから多くの謎が発生します。

物語自体は「町長が歯医者に知^{おとこ}歯を抜いてもらおう」という、ごくありふれた出来事を語っています。ところが、ありふれた日常的な物語が事件になってしまふ。そしてその前に、読者に「何かが起こりそうだ」と思わせるのです。そのために、他の作品にも登場する横暴な町長の存在と、物語の舞台の殺伐とした雰囲気、その背後にある社会的・歴史的状况を暗に語っています。

また、もう一点、ガルシア・マルケスによってよく用いられる〈宿命〉という要素についても言及しておきましょう。ここに宿命という補助線を引いてやると、見え方に変化がおきます。

彼の母方の祖母のルーツであるガリシア文化、さらには隣のポルトガル文化に根ざしている宿命感、中編「予告された殺人の記録」で、語り手の母親がファドを口ずさむという形で暗示されます。ファドとはポルトガルで生まれた民族歌謡ですが、本来は〈運命〉あるいは〈宿命〉のことです。それらを考慮すると、歯医者や町長が出会うことは実は〈宿命〉であり、二人は対決せざるをえないと見ることもできるのです。

一九五〇年代から六十年代にかけて、メキシコで西部劇映画が流行っていた頃、彼の一家はニューヨークを後にしてこの国にたどり着きます。



しかし作家としてだけでは食べていけないので、商業広告や映画の脚本を手がけます。彼は当時、映画に大きな可能性を見ていたようです。脚本の中で成功したもののひとつが『死の時』（一九六六）で、決闘で父親を殺された兄弟が復讐を試みるのですが、相手のガンマンは素人相手に戦いたくない。それでも対決せざるをえなくなる。それは〈宿命〉が介在するからです。『予告された殺人の記録』でも、宿命がもたらしたとみなせる復讐劇が描かれています。あるいは『百年の孤独』も、宿命がマコンド崩壊の歴史を超えた原因と考えられます。

少し読み進めると、この内省的なこだわりの歯医者とは、自分の仕事に自信を持っていて、入れ歯を磨いたり、道具をきちんと並べたりして、大変几帳面です。自意識過剰と言えるかもしれませんが。また大袈裟に言うところ、マッドサイエンティスト的なところもあり、明らかに世間とはずれている人物です。

一方、町長がやってきたのを伝えるのは歯医者の子息です。まだ声変わりでいていないらしいので、そのくらいの年頃だと言うことがわかります。無邪気で周囲の状況を考慮しない。自分だけの判断で状況を捉える。こういう子供の使用方も、ガルシア・マルケスは得意としています。

『百年の孤独』にこんなエピソードがあります。家長のホセ・アルカディオ・ブエンディアが家に籠もりきりになり、錬金術に凝っているのですが、鍋底の焦げつきから金を分離しようと試み、ついに黄色っぽい塊を取り出します。喜んで彼がそれを息子に見せると、息子は「犬のくそだろ」と本気で答えるのです。すると父親は腹を立て、息子を力一杯殴りつけるといいます。父親のホセ・アルカディオは夢想家で、一方子供は無邪気な現実家として描かれます。

一般にガルシア・マルケスの作品では、女性が現実家として描かれ、家を支えていることが多いのですが、『ついにその日が』に女性は登場しません。知菌で頬が腫れ上がり、髭も剃れないでいる男というのが滑稽である一方、その顔はグロテスクで怖くもあります。それを歯医者が治療するという単純な話なのですが、その表面的見かけにもかかわらず、

重層的な読みを可能にしています。

さらに深読みをしていきましょう。キーワードは〈暗示力〉です。どんなよりした天気は、重苦しい雰囲気表現しています。また、作品では直接語られず、他の作品と読み合わせるとわかることですが、この時期、〈町〉は戒厳令下にあり、夜間外出禁止令が敷かれているのです。短編では隠されていますが、コロンビアでは十九世紀から内戦が続いているという状況です。そのため、弾圧されている自由派に属する歯医者とは、保守派の政府から送られてきた町長と対決せざるをえない。しかも町長は、歯医者「同志二十人」の命を奪っているのです。それがわかってくると、この話は歴史の重みが加わってきます。そしてこの小説が実は個人のレベルを超えた、武器を使わない復讐譚になっていることに気がつくのです。

しかも、自由派が不遇な目に遭っていることは、診療室の描写からも想像できます。天井板がなく、柱が剥き出しに見えている。蜘蛛の巣が張っていて、使っている器具も古い。貧しさが浮き彫りになります。天気も青い空ではなく、どんよりした空模様が続いている。そう描くことで、いつ暴力事件が起こるかかわからない不安な雰囲気を醸し出している。そしてその背景には、内戦という状況があるのです。





その中で二人は対決することになります。歯医者^{おとしず}は麻酔を使わずに知菌^{おとしず}を抜きます。町長はマツチョらしく必死に堪えますが、さすがに痛みのために涙が溢れたのでしょう。歯医者が彼に涙を拭くための布を渡します。したがって、ここでは歯医者が一本とったと見ることができそうです。

このような書き方の〈暗示力〉は、エピソードの日常性を突き破ることになります。アルゼンチン出身の作家フリオ・コルタサルはキューバで行なった講義で、短編について、必要なのは「凝縮性」と「緊張感」だと言っています。「ついにその日が」は、緊張感の原因を明らかにせず、それを匂わせるだけで終わりますが、余計なものを一切削ぎ落とし、電文体を巧みに用いて、その「凝縮性」と「緊張感」を作品にもたらしめているのです。

現実の詩的置き換え

「ついにその日が」は、ガルシア・マルケスの創作活動の初期である一九六〇年代の作品ですが、その後彼は、大きく異なる文体を用いるようになります。『ママ・グランデの葬儀』の最後に置かれた表題作で用いられる、パロディックとも言われる饒舌な文体です。

短編集『純真なエレンデイルと邪悪な祖母の信じがたくも痛ましい物語』の、表題作を始めとする作品にはこの文体が使われ、さらに長編『族長の秋』では、それが切れ目なく続きます。この作品についてガルシア・マルケスは、いわゆるリアリズムに対して「現実の詩的置き換え」であると言っています。途方もないエピソードが引つ切りなしに語られるのですが、そこでは噂も、誇張された表現も一緒くたになっっていて、解きはぐすのが困難なため、事実や真実が見えにくい。しかし、今の世界はフェイクニュースやポスト・トゥルースに溢れていて、まるで『族長の秋』の混沌とした世界のようなのです。

それとはかく、最後に紹介する作品は『十二の遍歴の物語』所収の『光は水に似る』で、少年二人を主人公にしています。

カリブ地域出身の一家は、今はマドリッドのアパートに住んでいて、子供たちはクリスマスプレゼントに船が欲しいと言いつつ、それに對し、父親が、学校の成績が良ければ買ってもらえると約束します。すると兄弟は優秀賞を獲つてしまい、船を買ってもらいます。そしてそれを部屋に浮かべるのですが、何に浮かべるのかというと、なんと光の海の上なのです。そもそも父親が、光は水のようなものだと信じたことから生じた現象です。その言葉が魔術的呪文となって引き起こした奇跡と言えるかもしれません。

電球を割ると、光が流れ出します。その流れ出した光が部屋から溢れ出し、窓から滝のように流れ落ちていく。映画にでもしたい詩的な情景です。CGを使えば表現できるでしょうか。『ママ・グランデの葬儀』にこのような情景はありませんでした。これは別の短編集『純真なエレンデイルと邪悪な祖母の信じがたくも痛ましい物語』所収の短編に見られるお伽話的なファンタジーを、カリブから都会に移し替えたと見ることも可能でしょう。

作中、「詩」や「詩情」という言葉が出てきますが、読者には幻想と認めるようなことを、彼自身は先に引用した「現実の詩的な置き換え」であるという言い方をしています。ジャーナリスト出身のガルシア・マルケスは、初期には現実を現実として小説作品を書きました。それは社会的動乱期にあつて、社会参加が要請されたからだと言っています。

その後、詩的な文体を積極的に用いることで暗示力が生まれ、表現に複数の意味を持たせることができるようになります。初期の文体からの変化ですが、十年ほどの間にこれほど大きく文体が変わる例は、あまりないようです。暗喩に満ちた文章に、長々とした説明は伴わないのが普通です。そのため、ときには誤読されることもあります。ですが、それは単に事実を事実として伝える文章ではないからです。

ガルシア・マルケスほど、ひとつひとつの言葉の選び方にこだわる小

説家はそうはいません。彼はボルヘスについて、政治的には嫌いだ、言葉の使い方には学ぶところが多いと言っています。ご存知のように、ボルヘスは短編作家である前に詩人です。ガルシア＝マルケスが共鳴するのは、ボルヘスの文章の詩的なところでしょう。それはガルシア＝マルケスに詩心があるからに他ならないと思います。彼はこう言っています。「私は詩を書かない。けれども自分が書くことのすべてに詩的な解決を与えようとしている。」これは短編ばかりでなく長編にも通じる、彼の創作の原理と言えるでしょう。

参考文献

- Juan Luis Cebrian *Retrato de Gabriel García Márquez*, *Círculo de Lectores*, 1989.
- ガブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』鼓直訳、新潮社、二〇〇六年。
- 『ママ・グラナデの葬儀』桑名一博訳、新潮社、二〇〇七年。
- 『純真なエレンデイルと邪悪な祖母の信じがたくも痛ましい物語』野谷文昭編訳、河出書房新社、二〇一九年。
- 『族長の秋』鼓直訳、新潮社、二〇〇七年。
- 『予告された殺人の記録』野谷文昭訳、新潮社、二〇〇八年。
- 『グアバの香り』木村榮一訳、岩波書店、二〇一三年。
- アウグスト・モンテロソ『全集』その他の物語』服部綾乃、石川隆介訳、書肆山田、二〇〇八年。
- フリオ・コルタサル『対岸』寺尾隆吉訳、水声社、二〇一四年。
- オラシオ・キローガ『野性の蜜』甕由己夫訳、国書刊行会、二〇一二年。
- ホルヘ・ルイス・ボルヘス『伝奇集』鼓直訳、岩波書店、一九九三年。
- マリオ・バルガス＝リヨサ『若い小説家に宛てた手紙』木村榮一訳、新潮社、二〇〇〇年。
- イタロ・カルヴィーノ『カルヴィーノの文学講義——新たな千年紀のための六つのメモ』米川良夫訳、朝日新聞社、一九九九年。

※名古屋外国語大学出版会・W L A C 五周年記念シンポジウム
(二〇一九年十一月十五日)